

資料 折口信夫・國學院大學講義 発生日本文学史 二 昭和七年度②

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学文学部日本文学研究所 公開日: 2023-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 高雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000023

資料 折口信夫・國學院大學講義

發生日本文学史二 昭和七年度②

伊藤 高雄編

〔凡例〕

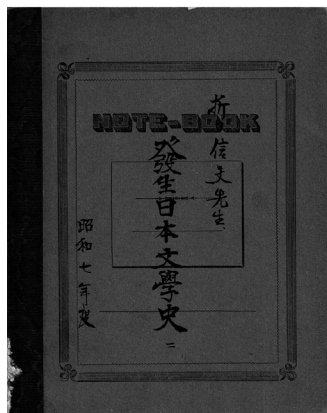
・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が昭和七年度に國學院大學にて行った講義を、門弟で助手の小池元男氏が筆記・整理したノートである。

・資料の解題は、國學院大學栃木短期大学國文學會の『野州國文學』第八十六号（平成二十五年三月）及び『國學院雜誌』第一一四卷第十号（平成二十五年十月）に報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本号に翻刻する資料は、ノート番号51で、前回翻刻の続きである。ノート番号51は表紙に「折口信夫先生 發生日本文学史二 昭和七年度」とあり、今回はそのうち、十月二十七日、十一月十日を翻刻する。

・表記は、原則として漢字は常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたところもある。また、翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて、省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。翻字不明の箇所は、□とした。

・本翻刻に際しては、伊藤が翻刻を行い、武蔵野大学講師渡部修氏、國學院大學大学院生（当時）郷田典子氏その他で読合せをし、最終的に伊藤が整理した。



発生日本文学史二（統） 折口信夫先生（小池ノート51）

十月二十七日 唱導文学

宗教的文学で唱導といふ一つの詞章による布教をもなすところ。旁々、唱導文学の発生期から、江戸末まで、この文学が力あり。その第一期のものを、今まで説いて来た。これから仏教の色彩が入つて、今までの唱導文学の様子が變つて来る。部曲文学の話は沢山あるが、漠としたところもあつたと思ふ。暗示を今まで与へ、古文獻のまとめ方を示した。今度は文獻を主とする文学の話に入る。

二つを纏ひ混ぜながら、話を進めてゆきたい。——私の話は、いろんな部曲の話がある事をことはつておく——。

文学としての文獻はじまつたのは、いつから。見当がつかぬ。純文学として創作されたものは律文では万葉集の一部、散文では飛鳥都の末頃、孝徳、斉明、天智の頃時代からはじまつてゐると見てい、と思ふ。だけれども、それがどの点まではつきり文学か、それとも外のものかといふ区画は勿論立たぬ。こゝでは区画せずに云ひながら諸君に文学と否とを考へてもらいたい。私の文学書に対する見方、文学史は殺風景たる事をことはる。

第一に申すべきは天武天皇の二十年に撰善言司が出来る。これはわれ／＼の国の習慣で、日本流に読むと、よごとづくりのつかさである。或は、よごとつかさと言ふべきものだと思

ふ。本當の処は読み方わからぬ。このものを通して文獻時代の文学、その系統のものを考へる必要あり。日本紀その他を見ると、——記でもさうであるが、この方は、はつきりしてゐない事がある——だん／＼宮廷に於て書物を編纂する機関を設けられたといふ記述に逢ふ。けれども、一つまとまつた役所が出来たのは、こゝの役所に始まると思ふ。撰善言司とはなにか。善言・嘉行等を連想するが当代、昔の人のい、言行を書きとめる教化の機関といふ風に考へられるかも知れないが、撰……司といふ書き方は奈良——平安初期へかけての例があつて、必ず物を作る司である。作る意がはつきりしてゐる。善言を書きとめる意ではない。新作であつて、すでに発せられた善言を書くのではない。造物、食物作りまで撰……司と書く。作る司で、保存するところではない。こゝは寿詞、——唱導文学の第二期に當るもの——古くは祝詞と寿詞がある。祝詞は上より下へ、寿詞は奏上式のもの。同時に服従を誓ふことば。それは長くまちはなかつたが、中間が出て来る。伝達者が出来る、——宮廷の中臣のごとき——上下のものをとりもつ。故に両者の詞が仲介者によつて近づいて混乱して来て、天子の言も、奏上言も皆、祝詞と言ふ事になる。故に私は祝詞といへば平安初期に完成した弘仁式、式に載つたもの、事にしてゐる。同時に寿詞といふのが、祝詞と同じ意味に用ゐられる。臣下のいふのと祝詞と一緒にしてはおかしいが、寿詞はめでたいことばといふ氣持で用ゐてゐる。

今日降る雪のいやしけよごと

万葉ではよい事の意味にしてゐる。奈良になると、寿詞の意味不明になつてゐる。つまり奏寿、宣命、と區別して統紀辺には書いてゐる。これは古い意味の寿詞、祝詞である。祝詞の中に寿詞をこめたと同じく寿詞の中に祝詞までこめて了ふ時代があつた。夙くから、先にも言ふた善言といふのは、全くこの寿詞である。奏寿を書くところ。これはことほりをつけて、天子に申し上げる詞は大昔は同じ。その場合／＼に応じたものを後に作つて来る。儀式の時によみあげる新しい詞章を作る役所。天子より命ぜられると、それに答へて書いたものも寿詞の中に入る。日本の歴史を作れ、律令をば作れと言はれて、書くと天子の命で書いたもの故に、皆寿詞といふ事になる。古くは憲法、法制は皆のりと訓んでゐる。これは天子より世へ下すとのり。編纂手続きから云ふと祝詞と同じ事。祝詞の一種である。けれど同じ書物が、天子に命によつて、編纂して奉る場合寿詞で、天子が発布されると又、のりとなる。

撰善言司が何をしたか。書いてはないが、内容からいへば広狭のすべての祝詞・寿詞を作つたと見てよいと思ふ。さういふ理由はその時に職員として選ばれた人が大宝令の編纂官でもあつた。すると、撰善言司の爲事が、全部大宝律令の仕事が全部であつたといへないにしても関係ある事はわかる。関係してゐる人の書いたものが他にあるから見ればもつと広く撰善言司の爲事がわたつてゐたと見る方がよいやうだ。――

例へば、伊与部馬養等云ふ学者は詩（懷風藻）も歌も作つたらしく、支那風の小説まで浦島子伝（小説味多い伝記）を書いてゐる。（小説とは、支那では伝記と區別がない故に題材の扱ひ方が小説的になつてくる。ろまんていくな題材を伝へやうとするものが、歴史と異つて小説となるのだ。歴史上の事実でもあり、小説でもあるのだ）残つたものまでも撰善言司の爲事とはいはぬが、その爲事は一局部でなしに、いろいろな文章を日・支・散文・律文と何でも作れる人を集めたと思ふ。も一つ、この時代から宮廷に関する詞章その他のものを書くものは、皆漢学に練達してゐる人である。それが詩も歌も、宣命も、法律も、歴史も書いてゐた事は事実。撰善言司の爲事は支那風の詞章と限らず、日本風のものも書いた。同時に善言はよごとと訓むべきだと思ふ。万葉でもよごとをよい事だと思ふてゐるのだからして。よごとは天子のよを呪する詞であるから、よいことばと考へられた。祝詞も寿詞も同じと考へる事が早くから萌してゐたと考へたい。

最初の文学的の官吏は、漢学の素養あつて、古い日本の文章まで書き改めて行く事が出来る人々であつたと定めて行かう。第一に問題になるのは、日本で一番最初の散文は何かと云ふ事。これは前提がある。文学は散文か律文か何れが先か。まづ散文が出る理由がない。律文がはじめに出て陶冶、堆積してゐる中に文学意識が出て来る。では散文はいつ頃からか。無難な言ひ方は平安の女房文学が起つた時と云ふ事になるが、まだ前がある。日記が文章となるのには前置きがある。

それは律文と散文との間に股をかけてゐるもの。これをば、文字で書くとは散文で、読むのは節づけてよむもの。この経路を平安朝の文学にしても長く通つてゐる。かうしたものが多い。まづ最古のものは、祝詞、宣命である。祝詞には律文的要素が多いが、書いた処は散文らしい。宣命は更に律文要素が少なくと感ぜられる。それ等のものは読み上げ、唱へられたものに、違ひない。書かれたまゝのものではないのである。読むのが条件であつた。その種ものが次第に読まなくなれば散文を生み出して来るに決まつてゐる。最初の散文は祝詞と宣命。も一つ前は、祝詞、寿詞である。われ／＼には統紀以下の六国史を読むと、宣命がかなりの分量出る。ことに統紀には多い。この宣命が誰が作れたかと云ふ事。宣命はそれ／＼の場合に適合したものでなければならぬ。特定なものではなければならぬ。伊勢大神宮へ宣命使が行く時等は定つてゐてもよいが、人の死んだ時、金が出たので大仏をまつるとか、新皇后を立てる時に立てる時の宣命は、新しいものを作らねばならぬ。古い形をついではあるけれども、それを作る人がなければ出来るわけではない。宣命は宣命と云はれた頃より書物であつて、後に歴史の中へはめこまれて来たのである。宣命を作る人が入用。天子は祝詞の一部は伝誦されるが、宣命は作りはしない。故に平安朝で云へば太政官の書記官が作ったのであらう。公式なものと非公式なものとがあり、非公式のものは女房の手より天子の言が筆記せられて出ていつた。公式のは弁官が書いた。その前には撰善言司がかうした為事をし

てゐたものと思ふ。撰善言司と云ふ語は意味広く、広い内容にわたつてゐると思ふ。撰善言司の説明の為に平安朝の事も少し云ふと、馬養以外にも、同様の人が想像出来る。野中河原史満、秦大藏首萬里の如き人が飛鳥の都の末に出て来る。河原史は、姓が漢学に関係ある事を示してゐる。河内の西文直の一分派である。大和の河原にゐたので、河原史で通つたのである（野中史は、旧事記を持ちだした人々と同系統。）大藏首も帰化人である。河原史は齊明天皇が自分の孫、天智の御子、建王が五才で死んだ時に、御子の為に歌を作らせて、いつまでも伝承せよと命ぜられた人である。秦大藏首万里は、天智帝の愛妃の死んだ時に天皇の為に歌を奉つた人であつた。処が、日本の短歌はこの飛鳥の末、藤原のはじめが勃興期である。それだけ技巧が立派になつて来てゐる。短歌の形が意識せられて来て、歌の中、原則的と認められ出したのだ。この頃から表現・技巧が俄に上手になつた。今までの歌が長歌の一部分、旋頭歌の一分派であつた時代と變つて来る。表現法はつきりして来る。それをはつきりさせたのは、漢学者の力で、奈良朝までこの事は続く。日本の短歌の表現能力を充分にしたのは、漢学者。漢学で表現力ある人が、歌をはつきりさせ、祝詞、宣命にも携はつて、はつきりさせて来た。紀等の記述の順序等は信ぜられないが、ともかくもこの人々の関係した歌を見ると、時代が變つた事がわかつて来る。八雲立つ、の歌の如き、半分きりわからぬ歌である。沖つ鳥、等、表現が未熟なのだ。皇祖の作ではない。わき出た歌。

飛鳥まではわからぬ歌である。神代巻の歌から中間がわからぬ歌で、飛鳥からはつきりする。それは漢学に経験ある表現能力の豊かな特殊な人が歌に関与して来た為である。秦大蔵首の歌と云ふ、

もごとくに花は咲けどもうつくし妹がまた咲きでこぬ

山川に鴛鴦二つゐてたぐひよくたぐへる妹を誰かにけむ天智天皇の意志を表してゐる故に、意味がある。単に歌を作つて遊んでゐるのではない。天智天皇の愛人が死んだから、天子の代りに歌を代作したので。蘇我石川麻呂の女が死んだ時の、単に奉つたのではない。斉明帝は、天子の中でも歌が上手である。伝歌から見れば、けれど代作歌であるのだ。伝承せよと云はれたのは満が奉つた。その人、そしてその歌を伝へしめたのである。全部代作である。

いまきなるをむれが上の雲だにも　しるくし立たば何か歎かむ

日本人には類型以外に何も云へないのだ。これは代作によつたのを昔なら、御名代部が出来る処なのだ。部曲は出来ず、歌によつて建王の事を家へて行けといふのだ。これも史の作であるに違ひない。万葉一の三番にある歌、中皇命と云ふのは斉明帝である。間人連老をして作らしめた。そして舒明天皇に奉らしめた長歌と短歌一首となる。この歌は歌はれた境遇のわかる歌である。使ひがもつてゆくに定つてゐるのだから、老の名がその意味で出されたのではない。別に老が代作した事を示してゐるのである。

たまきはる宇智の大野に馬並めて……

支那風な对句意識のはつきりし出てゐる。あの頃に詞人が頭をあげてゐるが、私は歌の美でなく、漢・国文・詩・歌を作る漢学者があつたのだと思ふ。その漢学者の中には、帰化人が多い。その点で不思議である。年代が長く日本にゐた人であれば、自由に日本文学であるのに、作り方が新しい。日本人は、外人がすぐ日本文が出来ると思ふたのである。王仁が、難波津に咲くやこの花……

を作つたといふが、日本人はかうした事が出来ると信じてゐた。

采女はや、耳はやの歌で、外人が殺されやうとした事もいふと、平安初期の伝説で東人が日本流の歌を作るといふ如き。年をへし糸のもつれの苦しさと云ひ、

わが国の梅の花とは……

の如く、どこの人でも歌がすぐ出来るといふ信仰が日本人にはあつたのだ。東人は、実は歌が出来る事情がある。も一つは、日鮮語が近くて歌がすぐ出来るといふ風な事を越えて、日本人は外人にもすぐ歌が出来ると信じてゐた。外人がやすくと歌を作る点に問題をはさんで考へねばならぬ。日本の□は□□なもので外人にでもすぐのりうつつて作れると信じた。けれども、短歌は割合に作りやすいと云ふこともあつたらう。

外国人、帰化人、又その子孫、日本の漢字を修めた人が日本

の表現能力を開拓した効は多きかつた。それを今日より見ると、それが昔の本当の日本式の表し方と見るのは無理ないが、昔の人が見れば、ハイカラなものであつたに違ひない。この話は、以前の文学史家の云ふより、日本文学は支那の影響を受けてゐるといふのと少し違ふ。も少し愛国的な議論である。

十一月十日

日本文学が書かれて来るのにどれほど漢文学が影響したかを語つた。証拠として万葉の巻七、巻九を中心として申した。九は漢文学に関係ある人、漢学に関係ある人が多く与つてゐると云ふた。その時に七・九は一つづきのもので、——万葉はすべてさうで、十七〜二十までは一つの性質で、他の巻は二つづ、組合せになつてゐる。七と九は非常に似たものである。——この巻の中、よく見ると云ふと、房前の関係が多い。藤原四家の中、式家と称する武智麻呂は特別に関係があるやうだが、七・九は北家に関係あり。一番はつきりしてゐるのは、九の七夕歌一首並びに短歌とある左註に、

右件歌、或云、中衛大将藤原北卿宅作之

これは、房前の家と見る他、考へられない。この外に、房前らしいものがまだある。巻七に、七首とあるが、実は八首らしい。

右七首。藤原卿作。未審年月

巻十九に二首歌あり。

右二首。三形沙弥贈太政大臣藤原北卿之語作之也。

と左註がある。三形沙弥は三方とも書かれた万葉の一作者。贈太政大臣は、房前。この他に房前らしいものが大分出て来る。万葉はそんなにして細かいものを集める要がないのに、新しく努力をもつて来た藤氏の人々が万葉の原本、又は言ひ直せば、万葉の材料となつてゐる歌に深い関係ある事を示す為、房前がさうであり、宇合が万葉に関係ある事は明らかで、宇合が漢文学の素養があつた事が明らか。その家の保護の位置にある人、或は出入してゐる人が歌を作つてそれの人々に奉つた。同時にそれらの人が漢文学を傍らやつてゐる。七・九は、漢文学の影響のはつきり見えるもの。宴遊の場合、その家の主人を欲する意味の歌を沢山作つた事が考へられる。つまり歌と詩が一作者によつて作られた最後の歌は七・九に見えてゐる。さういふ人とが勢力家の家々に出入してゐる事が漠然と感ぜられる。家持が主となつてゐる十七以下の巻々は漢文学の形式をもつて日本文学をあらはさうとした。漢文学中へ日本の歌を挿入せんとしてゐる。これは又別である。日本文学のあるのを認めて海外の文学に挿めて調和させんとするので、この形はよく考へると古くからある文学。万葉は歌が中心になつてゐる事は十七〜二十でもよく見えてゐるが、ことに漢文学に日本文学を調和させんとした形のものを見ると、日本の文学が文学になつて来る時期の様子をば万葉の巻十七以下が示してゐる。更にはつきりした例は、巻二十。大伴旅人が中心となつてゐる巻五を見ると、これは又

日本文学を漢文学に調和させやうと云ふのと、漢文学が日本文学を胚胎したのとの過渡期を示してゐる。漠然たる日本文学のさういふ形の歌と家持の歌では少し違ふ。

実のところは、一番最初に小説の形が日本へ出て来た事は非常に古い事。小説は支那で見ても、昔は漢魏の時代即ち唐以前と見られた。今では晋唐の時代まで降りてくる。小説といふ事は小人の説話といふ事にすぎない。日本では大小で宮廷と民間と分けてゐるやうな事が支那にもあつて、小は民間、小人は民間の人、説は説話といふ事。民間説話をそのまゝ、筆録しても小説になる。その支那の小説の形が日本に盛んに入つて来てゐる。一つは地誌のよるべき形とし、一つは伝説の型として応用されてゐる。つまり漢魏小説が日本へ入つて来た。私がどんなに小さい限度で考へても、今日痕跡あるものだけが支那から入つたものとは限らぬ。たま／＼にして書かれたに過ぎない。平安朝の書籍目録にないからとて、その支那の書物は、平安朝に日本に現存しなかつたといふ事は信じられない。まして、どこにも出てゐぬからとてある書物が奈良朝に渡らぬとは言ひ切れぬが、同時に渡つたとも云へぬ。云へる事は、われ／＼が証拠になる日本にあつたといふ書物の何倍かの書物が入つて来て亡びて了つたと云へる。現にこんな世の末になつても、ほち／＼出て来てゐる。例へば、唐書に出て来る帳文成の伝には、張文成の文は愛せられて、日本の客が争つて、一紙でも欲しいからつて門前市をなしたと書

いてある。張文成の作では日本へ渡つたものは遊仙窟に限るとは云へない。彼の生前から沢山、日本にはいからがゐて、小説を読みたがつてゐたとは云へる。他の書でも与へなくなつてゐるものがあるに定つてゐる。宮廷と大宰府と両方にあつた本の外に、帰化人、留学生が、続々と本を持つて来たに違ひない。

かくわれ／＼の想像を超えた程度に、沢山の書入り、沢山の文学のまじつてゐた事が考へられる。故に日本の飛鳥↓藤原へかけて、どれだけ文学の氣運が動いてゐたか、想像つく。詩を作ると同時に歌を作り読書をしてゐる人が沢山あつた。どうしても、今までの文学の形が純粹なものになつて来るに違ひない。日本文学の中、平安末、鎌倉へかけて俗文学、口頭文学、宮廷の文学が一緒になつた。その中、漢文学と日本文学と一緒になつてゐた。詩と歌を合せると詩の対句を作つた時とが大きな二つの時期。江戸の読本の生まれる時期は、日本の散文と支那の文学によつて日本の散文を□つて来る。漢文学によつて整理せられ、日本文学の形が出来、文学らしくなつて来る。歌そのものは、しばらくさしおいて、今小説類のはなし。支那の小説は、小説の支道精神は道教のすく□。第二は、民間に伝説してゐる話——民謡。単に指導精神であるばかりでなく、道教化してくる。その時に一番都合のいい、形は人間界では宮廷の生活にあてはめる。一番空想的である。も一つ、仙人。ことに女仙の沢山ある世界である。又天子又は王と女仙との間に交渉の生れる話。宮廷生活の空想、女仙

の事を考へる。二者の調和したといふ三型の話が一段下ると普通の男が偶然女にあふといふ話。これは恐らく後の事であらう。さうした話が伝つて書かれ、誇張せられて来て最後に女仙の学者との交渉になる。この経路を経て小説が発達する。その中に一人称の小説が増す。学者が俺がかういふ経験をしたといふ純創作をするやうになる。その大立物は、帳文成、宋玉等である。支那の小説はごく最近までこんな事を云ふてゐた。そして一度に飛躍して了つたのである。日欧の刺戟を受けて、日本へも遊仙窟以外の軟文学が渡来したに違ひない。楚辞等も、屈原の作つた文でもえろていつくに見えるところが多い。楚辞の中、宋玉以下は非常に淫靡である。漢文学はいつでもわれ／＼の研究態度によつて新しいものが出るはづである。純文学・□語として見てゐない。さうした軟文学が日本の当時のはいからに喜ばれた。日本に支那人の芸術的な気持ちがかかる空気があつた事は、考へねばならぬ。機械的に読んだと思ふのは空想。だん／＼小説を読んで来る中に支那の小説が民間の説話を書いたもの故に日本の民間にも似た話がある。——伝説は世界中、皆似た話をもつてゐる——そこで読んでゐる中に日本のものを材料として書けると考へて来る。又、われ／＼は小説を空想の所産と考へたのはつい近頃の事である。今でも現実と芸術との区別のない人もある位である。昔ほどこれがひどい。つまり小説を現実に過去にあつた事実だと見て行く習慣が長かつた。皆あつた事で、わざ／＼作意を加へて作ると思はぬ。似た事が日本にもあるか

ら、書かうとて誇りと感激をもよほして書く故に小説の生れる最初の地誌又は家々の伝説に關係して来る。この土地にかうした伝へがあつた。神仙と村人との交渉とのなしは地誌の一部分である。或は支那の小説の本質として實際にあつた歴史をも交へてゆかねばならぬ。家々にかつてゐた人の伝説、昔この辺にゐた人の伝記だとかを書く。小説と家伝とは同じ事。奈良以前は可としてそれは「伝」といふ語であらしてゐる。歴史的な事。地租的な事、は云ひかへれば中央的な事。地方的な事といふ事になる。日本の歴史の中にはひとつとすると飛鳥朝の末（仮に）にあつた日本人が作つた小説から出て来た歴史が存外行はれてゐるかもしれぬ。日本の事を書くつもりでゐて、つひ、文章で事実が変る事がある。自分等の生活にない事を書かされると、文章によつて云ふ事、考へてゐる事が曲がつて来る。六朝駢儷体が好まれてゐる時代故に文章の為に事実が曲げられてゐる。書いてゐる中に支那の事実によつて脚色をつけた様に変つて了ふ。紀に表はれる諸書の中にはたしかにさうしたあやしいものがあると思ふ。日本・朝鮮の書から引いた事は支那影響が多いと思ふ。続紀はことにこの流行の最中のものを利用してゐる。日本紀で、飛鳥、藤原が大体形づいて、続紀が奈良朝を伝へてゐる。小説の気運の盛んな時の書だから材料は用心を要す。ことに宮廷生活については考へねばならぬ点が大部ある。晋唐小説で人気あるのは漢武帝で、この人の宮廷生活、女仙との交渉。次には則天武后。日本宮廷の生活に漢武・則天武后に似た事

があれば大馬力で書いたに違ひない。水鏡、逸話集に見えてゐるに過ぎないほど時代が整理したからよいが、支那の宮廷の淫靡を書いてゐるといふのは凡そ小説の上の支那の宮廷生活の引き写しであつたと思はれる。その断片が平安に残り説話化し、書物となつてあつたのだと思ふ。奈良より平安にかけておこつた井上内親王、早良親王等をめぐつておこつた事実等も支那風な空想に違ひない。孝謙称徳皇帝についての伝へ等は清廉を伝へる為に天子を犠牲にしてゐる。これは則天武后に関する影響がある。則天武后の子の穆天子伝等を見ると、さういふ種類のものが沢山あつて、孝謙称徳皇帝の御伝記の一部分を作つてゐると思はれる。結局、藤原百川の事を伝へ、清廉の事を伝へる為に書きたてる為に作つたものである。道鏡が法皇といふのは、天皇とは違ふのだから当たり前の事である。法の上に勢力を認めるのは、法政分離によつて自然の事である。法皇が天子になる準備だとは云へぬ。私等にして考へれば宮廷の歴史を舞台をまはした様に見える大事件にも小説種が入つてゐると考へねばならぬ事が多い。国史編纂当時に用ゐた材料、その使用の態度が違ふ。前代の書物だから確かだと信じた時代であるから。

も一つ考へたいのは法制の方面である。撰善言司の話をしたが、寿詞は宮廷の法律、命令すべてをこめて云つた語であらう。すべての和漢脈の書物を司るところ。時宜に適した新作の文章を発表する。さういふ点から話したい。一体、後世では古語の知識が少くない故に、漢字を日本語に訳す時に、ごく

少ない古語を融通して意味違つた漢字に訓するので、無理がある。たとへば、のりは、法、憲、典等に通訓してゐる。逆に、典をのりと訓むところから、支那の典の類字、似た行事をのりと云ふ。即位式をおほきみのり等いふのがそれである。昔から文化の度が劣つてゐた時代に、支那文化が輸入し、緻密な語ないので、大ざつばな訓を下したのが、歴史的に用ゐられて来た。ともかく、緻密な語がなかつたと言ふ事である。こゝに例に出したのりについて見ると、実のところ、寿詞をこの中へ含んで忘れて了つてゐる。われ／＼はのりから思ひ出すのは、それに対照的關係にあるよごとは早く忘れて了つてゐる。すべてののりの語で代用してゐる。のりとは考へ見るにあてずつぼうの説が行はれてゐる。われ／＼はのりとはのりをする聖なる場所、そこで発せられる語がのりとごと。こゝを約して、のりと云ふ。だから、天つのりとの太のりとごと、いふ様な事が云るので。既にのりと、云ふものは一つの約束がついてゐる。のりの場所があつて、そこで云ひ出すのがのりとごとである。

少なくとも法・憲は、のりに入る。古くよりさう訓んでゐるのは、誤りではなさ、である。するのりとは何か。のりは言葉によつて出たものと云ふ事。のりと、のりとは別。同じ点はのりといふ語を含むこと。共通点は上より下に対して発せられた文章。古くは口頭文章。世が進むと、筆記せられた文章になつて来る。故にわれ／＼から云へば、のりと一口に云つて含められる語が沢山ある。それが時代によつてはよ

とて表はされる。よごとが昔の内容をのり^りとに地位を譲り、語自身は意味が広がつて来た。まづ大体ある時代にはのり^りと云つたと仮定して説く。そののり^りには、故に漢文、国語いんな形があると思ふ。ところがのり^りはさういふ風にもとは口頭で出されたもので、法令、憲法にあたるが、対照的になつてゐるのは刑罰の事である。恐らく、のり^りと云ふ事は、為事として文官を生み出して来る。文官は何れ、普通の神主、昔の考へ方で云ふと、中臣の神主が代表する為事が、文官の為事となる。法律、命令を出す為事。又、一方、著しく違つたものがある。これは、刑律の文である。律のり^り・た^たずこの為事は次第に武官の為事になつて行く。平安朝になつても、刑律に關した役人は武官である。武力で悪人を圧へたのでなく、更に古い習慣がある。紀を見ると、罪を正すのはすべて物部の為事である。物部が刑罰を下す時に、何ことば——こ^ことわざみ^みたいなものを発する。その諺と云ふのは、刑罰受ける者に云ひ聞かせると同時に、刑罰の為の機関になるもの、為に云ふ語。命令的なものである。それは何れ伝統的に傳へた語にちがひない。ともかく物部が罪を正したわけである。ところが刑を古くから刑部と書いておさかべと訓んでゐる。刑部の氏の名と形とどれだけの差があるか。水盤をか、へた話のある忍坂ノ大中ツ姫といふ皇后の為に、忍坂部といふ御名代部を作つた——昔、文献、御子代、御名代部を混用してゐる——その場合に刑部を定めた^と記・紀共に書いてゐる。すると、おさかべと云ふ音だけは、大中ツ姫と關係ある事が

わかる。(大春日皇后の為に春日部を定めたのも同じ)。それがなぜ刑部と結びついたか不明。刑におさか^かの訓はないのだ。刑部は後もの、罪をた^たず為事をするやうになつたと考へるか。それとも、おさかべの名をつけられた部落は、も^もとから刑部の為事をしてゐたか。二つの推測が行はれる。旧辞本紀——江戸以後、一部分、信ぜられる——によると、刑部はそれより前にあつたと見られるが、本の価値が低いから信ぜない方がよい。われ^れ／＼は、刑部の民が刑部の為事に携はり始めたといふ推測の方がよささうである。

刑部といふのは、刑部の中に為事が分れて来る。その中に刑部の鞞負部と云ふものがある。略してゆげ^げひと云ふ。何の為に刑部から鞞負部が分れて出たか、わからぬが、刑部の中に鞞負の特徴を備へてゐたからだ^だと云ふて差支へがないと思ふ。かく考へて来ると、大体、刑部の中に罪を正すもの、含まれて来る理由がわかる。物部の為事の中、一つの刑律に關与した事を行ふものが刑部の中に出て来たので、忍坂部を刑部に当てたのだ。

忍坂大中姫の御名代の刑部がもと武□かどうか不明。その中に物部の為事に似た事をした。それで、忍坂部より忍坂の鞞負部が出る。鞞負のあるのは物部と似てゐる。それで、忍坂部が刑部の字と合つて来るのがわかる。

ともかく刑部の職業団体が刑律に關する事をした事が考へられる。刑部は成立よりして御子代部で、それが刑律を司る職業団体になつてゐるのだ。われ^れ／＼は昔から部曲に対して、

職業団体とも考へるが、新しく立つ部曲は職によつて、なく、単なる人民の集団を個人の所有権の下におくのが新しい意味の部曲だと考へられる。

又、ある種の職業団体の部落がある人の所有に帰せしめる。オサカベは忍坂大中つ姫の名だが、刑部の部落の爲事は、刑部の爲事で、そういふ爲事の村を大中姫の御子代部とした。なほ考へると、理由がとけやう。われ／＼の時代にはその事情不明だが、ともかくその村をはじめたと考へられる。村の最初の村主が、その爲事ははじめ、その人の擁護によつてその職業が確立してゐたと見ねばならぬ。仮に語りごとが伝つてゐるとすると、その物語によつてさういふ事が説明せられてゐる事が考へられる。かく考へて来ると、事実がさうかどうか、わからぬが、職業団体、部落發達の歴史についてはまだ／＼わからぬ事が多い。

この武官の爲事の中、政治的なのは刑部で、普通の物部は門を守る事であつた。本當の意味の武官に対する文官の意味は、刑律の役人と云ふ事。

たとへば平安朝の檢非違使、彈正台等が出来るもとを考へると、上からでなく、下から出来て来たに違ひない。下役人を総括する上の役人が沢山出て来る。さういふ部落を総領する家筋が出て来る。部落自身の中から出る事もあり、外から与へる事もある。宮廷の伝へでは、宮廷より与へた事になる。部曲又は部落が世の文化に遅れた職を持つてゐる時にことに総領（とものみやつこ）は宮廷より与へた事になる。それで

この、部曲が皆銘々に伝來の由縁を伝へてゐた。その由緒にははじめの人を考へる。この時に、血族的にはじめからついてゐるものと与へられたもの——御子代、御名代を考へるやうになつて来る。下から出来て来て、治める為のものゝ後に作つて来る。部落の総領が出来るのと、同じくたとへば刑律の事をする人が多くなるとその抑へをする人が入る。そこに職の頭が出来る。それが官吏化して来ると、上に役人がゐて、下には役人でないものが出来て来る。近代まで裁判の關係者の下のもは何でもない人で、文化の發達に遅れたもので、恐ろしい武力をもつてゐて、世から卑しまれ、普通人と種族が違ふと考へた人まで、その下にゐたのだ。下役人といふものはすべて、平安朝の習慣でいふと一度、罪人になつて来たものである。俘囚、又は罪人が下役人であつた。この人々がお上の役人故に恐いのでなく、恐ろしい力をもつてゐるから怖れたのだ。